

輝かしき日々



Story By

Makoto Nekoya

久々の休日は喧噪で明けた。

来る 何が来るのかは分からなかったけれど、一五歳から戦場に身を置いてきた、軍人としての皮膚感覚が、熟睡に近い状態であつてもキルヒアイスを即座に覚醒へと導いた……が、襲来までの間隔が短すぎた。覚醒から全身の筋肉が警報を受け取り、弛緩から緊張へ転移した直後、それが来た。

「……ぐうっ！」

歴戦の帝国元帥ともあろうものが……などという感覚はすでにない。肺から空気をたたき出される衝撃を筋肉の力ではじき返し、キルヒアイスの両腕が反撃を開始する。目にもとまらぬ早さで宙を突き刺した両の腕が、くるりと回って襲撃者の首を巻き込む。思いつきの力で引き寄せると同時に、ほとんど予備動作もなく跳ね上がった長身の両脇にそれを抱え込んだ。

「おはよう、悪戯坊主たち」

「グーテン・モルゲン、^{フアーター}おつ、^{フアーター}父さま！」

にぎやかな合唱が、笑いを含んだキルヒアイスの声に応じる。彼自身を三〇年近く若返らせた、有り体に言ってみればまだ幼児の顔が満面の笑顔で左右から彼を見上げていた。

「^{フアーター}父さま？」

寢室の戸口で控えめな声がする。こちらは彼の妻となった女性を、髪と瞳の色を除けばやはりそのまま五歳の姿に変えたような幼女が、ちよつと困つたような顔で立っていた。

子供たちはいつの間にか大きくなる。世の男親に共通の、そ

それは錯覚かもしれない。女親にとって、子供たちは『苦勞の末にやつと育て上げる』作品であつて、播いた種がいつの間にか芽を出し、茎を伸ばし、葉を茂らせて勝手に育っていくようなものではない……らしい。彼自身を育てた二人の大人……すなわち父と母の、あまりにも食い違ふ子育てへの思い出が、彼にそんな感想を抱かせていた。

それでも、長女のクラリベルがすでに五歳の声を聞き、『キルヒアイス家のダブル・ジーク』もまた悪戯盛りの三歳になっているのだ、と思うとき、どうしても『いつの間にか大きくなつた』と思ひかけ、その都度、彼らをここまで育て上げた彼の伴侶を裏切つたような後ろめたさに襲われずにはいられない。

「おはようございます、父さま」

「おはよう、クラリベル」

娘に向かつてキルヒアイスは笑ひかけ、ふと隣のベッドに視線を走らせる。予想通り、すでにアンネローゼの姿はなかった。

相変わらず、アンネローゼさまは朝が早い。思い、ふたたび苦笑する。彼女をその名で呼ぶことにも慣れた今でも、時として彼女をアンネローゼさまと呼んでいる自分に気づくことの少なくないキルヒアイスだった。

そう、アンネローゼは昔から朝が早かった。彼らが晴れて『夫婦』と呼ばれる立場を確保して後、いやその前も……いや、初めて出会つた時、彼が一〇歳、アンネローゼが一五歳だったあの『輝かしき日々』ともいうべき半年のあのころから、彼女はミューゼル家、いやキルヒアイス家の誰よりも早く起きていて、彼に笑ひかけてくれたのだ。『おはよう、ジーク……』と。

じたばたと暴れる悪童二人を軽々と抱えたまま起きあがり、クラリベルを連れてダイニングへ降りていくと、すでに朝食のテーブルでコーヒー・カップから湯気が立ち上つていた。

帝国元帥であり、^{デア・フロッスヘルツォーク・ダス・インペリウムス}帝^国大^公の夫人ともあるものがと、本人たちは『キルヒアイス元帥の腹心の部下』と思つている自称取り巻きたちが、いろいろと苦言を呈してくるが、キルヒアイスもアンネローゼも歯牙にもかけていなかった。手ずから一家の食事を用意し、子供たちのおやつ菓子を手作りするのは、アンネローゼにとって最大の楽しみであるらしかった。

「おはよう」

ダイニングに接した、帝国元帥邸のそれとは思えぬほどごちんまりしたキッチンからアンネローゼが穏やかな微笑で夫と子供たちを迎えた。

「私が将来、何になると思ひました？」

どんな弾みで、朝食での話題がそうなつたのか、キルヒアイス自身にも不分明だった。彼ら自身の子供時代は基本的には食事時の話題にはしないのが、キルヒアイス家のみならず、皇帝一家の不文律のようなものだった。彼らの青少年時代を話題に上せば、必然的に話題は、彼ら自身が最も触れたくないある一点へ収斂する。この時は、そう遠くない未来に皇太子としての地位を嗣ぐことになるだろう、アレクサンデル・ジークフリード皇子の話題がきっかけだったかも知れない。

「そうね」

アンネローゼはちよつと困つたようだった。細い金色の眉を僅かに寄せ、それから表情をゆるめる。

「そうね、昔のジークを見ていたら、学校の先生……かしら」
「両親にもそう言われましたし、ラインハルトさまからもよくそう言われましたよ」

ラインハルトの皮肉だったかも知れない。汚辱と墮落の限りを尽くした旧王朝の貴族どもの間にすら、賞賛すべき美しさを、賞賛すべき長所を見いだすキルヒアイスの寛容さへの。お前が学校の先生なら、ぐれる生徒はいなくなるだろうさ……と。無論、キルヒアイス自身は皮肉とはとらなかつた。皮肉だったとしても、そうして彼を理解し、信じようとするラインハルトへの信頼は揺るがなかつたのだ。

「わたしもそう思います……でも、ラインハルトさまは……そのやはり軍人になられた、と思いませんか？」

「そうね」

再びアンネローゼの繊細な容貌が微かな憂いに沈む。頷いて、彼女は ^{キルヒアイス} 夫の言葉を肯定した。

「そうね……多分、あの子がどう育つても軍人以外にはなれなかつた……かも知れないわね。ええ、ただの軍人ではなくて……きつと皇帝になろうとしたでしょうね」

でも アンネローゼはゆるやかに髪を左右に揺らめかせた。あんなに他人に頭を下げるのが嫌いな子が並の軍人で終われるはずはないから。

「あなたがいなかったら、皇帝にはなれなかつたと思います」
言い切り、それから彼女は木漏れ日のような微笑を浮かべて、

クラリベルの金茶色の髪を撫でた。

「知っていて、ジーク？ 『梅檀は双葉より芳し』 って言葉」
「とんでもない人間は、子供の時からとんでもない」

言わんとするところを察して、キルヒアイスは笑った。ラインハルトさまは子供の時からラインハルトさまでいたから。
「そうよ。いつもそうだった。ラインハルトが突っ走って、あなたが止める。でも最後は二人で一緒になって一生懸命になつて……。初めて会った時からずっとね……覚えている、ジーク？」

アンネローゼが指さした先を追って、すっかり明るくなった窓外に視線を走らせたキルヒアイスの表情に苦笑が深くなつた。

帝国元帥邸とは言え豪邸のそれとはほど遠い、さして広くもない庭の向こうの通りで愛犬を散歩させる人々の姿も遠くはない。彼の苦笑を深くさせたのは、黒っぽい毛並み、短いしっぽとしかつめらしい頬髭を蓄えた角張った顔つきの親子二頭連れらしい小型犬の姿だった。

記憶の底をまぐり、その犬種の名を引き出そうとするが、政治と軍事の両面にめざましいほどの才を恵まれたこの赤毛の帝国元帥の頭脳も、犬種に関する知識までを蓄えておくには不足のようだった。

代わりに、唐突に脳裏に浮かび上がったのが、彼がまだジークフリード・キルヒアイス以外の何者でもなかつたころの記憶だった。

「たしか、……と言つたかな？」

親子二頭連れの小型犬を連れて足早に歩く男性と、それを見